

## 平成28年・久女忌に思うこと

— 没後70年にあたり —

早稲田大学環境総合研究センター 参事

石 太郎

この原稿を書いている時はすでに桜も散って、新緑の季節へとあわただしく時が過ぎていく。今年も1月21日に久女忌に参加させていただいた。今年は杉田久女没後70年の節目の年と言うことで、今迄の久女忌のことが思い出され、ついつい時間の経つのに任せてしまった。今年の久女忌は、北九州市北橋市長の参加を始め、北九州市役所のご支援、久女研究の第一人者坂本宮尾先生の特別講演と内容の濃いものであった。節目の年として久女忌で感じたことについてまとめた。

70年という年月に様々なことが頭をよぎる。私が生ま

れた時に鎌倉の母と赤子の私を久女は訪ね、子供を大切に、と行って小倉に帰っていったと母から聞いた。その後戦火はひどくなり母と私は杉田宇内の故郷でもある愛知県の田舎に疎開し新たな生活が始まる。小倉と愛知県の距離は遠く、戦時下でもあり母は久女の死に目に会えなくて、杉田宇内が久女没後小倉高校を退職して故郷に帰ってきた時の白木の箱の骨壺が死に目だったと嘆いた文を思い出す。私は、10年以上田舎に暮らし杉田宇内のことは実感がある。母の、小倉の子供時代、鎌倉時代、戦前、戦後の過渡期の時代、愛知県の疎開時代、疎開中の久女句集発行、田舎から東京へ、激動の時代とその間の久女にまつわる出来事は、決定的に母や我が家の運命にかぶさってきた。そして今日、振り返ってみれば我家の時の流れは、杉田久女のこと大きな影響を与えてきた。

今年の久女忌では、今迄以上に母の気持ちを思い出すこととなった。父は私が生まれて約50日で出征したので、母との生活実感が強い。母は子育てと久女にまつわる葛藤の中で生きて一生を久女復活に捧げた。今年の久女忌の雰囲気浸つたらどんなに気持ちの安らぎを得たことであろう。それほど今年の久女忌は例年とは違った雰囲気



小倉北区「圓通寺」 講演の坂本宮尾氏

気があった。

久女や母にとって小倉の圓通寺は心の原点である。母の回顧文によると平成7（1995）年1月21日久女忌に出席し、その法要後圓通寺の林文照和尚から、「恨みを捨てなさい」と諭されたと言われたが、「…ありがたい言葉ではあったが、久女の死後、久女の虚像のみの世の中に躍り、この50年、痛憤の思いは消えない」と心の葛藤がにわかには払拭できなかった悩みもあったことが書かれている。私の手許に母との日常の会話をメモにしたノートがあるが、平成12（2000）年3月12日のメモに「…最近では、今までと違った普通の人が久女のことをわかってくれるようになった」と言い、「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」の心境になった」と書いてある。母の努力や北九州を中心とした多くの方々の支えで、世の中の久女への評価が変わってきた。今回の久女忌の雰囲気は、母がいたら大いに喜び、また世の変化に驚くことだろう。

メモには、母の久女復活に取り組んだことから得た、人間の生き方について「人間の生き方とは、自然な生き方がいい。いいものは良いし、悪いものは悪い、とにかく人間を主とした生き方をすべきで、環境に合わせた生き方をすべきだ。生きるということは、心の世界である。

共存共栄、人も動物も草木も同じだ。排他的なことは良くない」と晩年の心境を述べている。「排他的」という言葉に心の葛藤の跡が忍ばれる。多くの葛藤から文照和尚の諭しもあり、世間も久女を様々な角度から評価するようになり、次第に心の氷解が進んできた心境があった。

今回の久女忌では、杉田久女研究の第一人者である坂本宮尾先生の特別講演を聞き、またお話できたことは感激であった。多くの久女研究の著者の中で、坂本先生の久女の著書は大変に調査がしっかりとっていて、また先生の思想、考え方が沁みこんでおり、勉強になった。母が亡くなったあとお話したいいつも思っていたが実現しなかった。今回の久女忌の特別講演がその機会となったことはとても幸福であった。初めての対面であったので怖い気持ちもあったが、とても気さくで話しやすく、しかも芯がしっかりとされていることがとても嬉しかった。坂本先生は、俳人であるばかりでなく、東洋大学名誉教授ということで話がとても分かりやすく、聞き手を魅了した。久女の一生について女性の立場を理解したうえで、客観的に久女の評価についてお話された。大変優しい口調で話に包容力があつた。坂本先生のお話の特に印象深い点は

・杉田久女が句集発行に奔走努力してもかなわなかったくだけは、今回の講演の圧巻であった。ここまで調べてお話をされ、昨日今日のこのように臨場感と迫力があり圧倒された。むなしく、あわれで、悲しく、唇をかむような久女の心情があますところなく語られ、涙がとまらない。

・そして「久女は必ずしも悲劇のひとはない」と言う愛情に救われる。「苦しみの中でも一途に俳句という詩を信じて、俳句を作っていた。その心意気が私たちの心をつかんでほなさない。」という賛辞。久女も母もこれを聞いたらどんなに安らぐことだろう。久女への愛情、女性の目から見た久女像があますところなく伝わってきた

・男性への宇内について時代背景、宇内の人間性、田舎の家との葛藤を丁寧に表現された。画家としての宇内の教え子の息子さんが、坂本先生と同じ大学の先生だったとは！いろいろと縁のつながりが話の厚みとなった。

等々の人間像の語りのすばらしさにあふれた。(注)坂本先生は学生さんに講義するように分かりやすく、ポイントを外さないで話し方にとっても説得力があつた。坂本先

生の特別講演は、久女への人間愛があり、聞いていて分かりやすく、心に沁みる内容と口調であった。

坂本先生のお話を聞きながら、母の心の葛藤を重ねると、没後70年という時の流れに、多くの人々が登場しそれぞれの人生が綾なした。そして時の試練を経て新たな時代へと移って行く。久女にまつわる多くの運命が綾なし、久女忌は敬虔な気持ちになる雰囲気があった。没後70年も経ちこれだけの影響力を残す俳句、芸術、文化の力に改めて感銘した。久女の生き方、俳句への努力、芸術観、周りの方々のご支援、母の久女復活への努力等々多くのことが時の流れの中で集積した結果である。

坂本先生の講演を聞きながら、自分もあらたな覚悟で生きて行かねばならないし、この運命の中にいる自分はどのように生きるべきか、これからの生き方が課題であると身が引き締まった。

この特別講演会は、北九州ゆかりの俳人ということで、没後70年



関門海峡の和布刈神社 坂本宮尾・石太郎氏

の節目として北九州市役所もバックアップしていただいた。北橋市長からは、北九州として没後70年にあたり、更なる顕彰事業を考えて行くというお話もあった。多くの方々の気持ちを動かしている俳句の力、俳句の芸術性、久女の生き方等の影響力に改めて感銘した。

母が言うように「自然な生き方」の境地になるにはまだ時間がかかる。しかし、今回の久女忌のように、人生へのエネルギーや生きる意味を考えさせていただける場は貴重である。北九州市の文化の力の源泉であると感じた。

会場では「青嶺」の会員の方から励ましの言葉もいただいた。このように自分の気持ちの検証の機会をいただいている岸原主宰にはいつも感謝の念で一杯である。

(注：坂本宮尾先生特別講演録

杉田久女没後70年 特別講演『杉田久女―その実像を追って』北九州市市民文化スポーツ局文化部文化企画課  
平成28年3月31日発行)